

御田（おんだ）

日本では、米と宗教が密接に結びついている。稲の生育期は、神事に始まり神事に終わる。苗が育つように儀式的な「田植え」を行い、その恵みを神に感謝する「収穫祭」が行われる。住吉大社の本宮のすぐ南側にある古い田んぼでは、神様にお供えする神聖なお米が栽培されている。

伝統的な説によるとこの御田は、211年の住吉大社の創建時に作られたと言われている。住吉大社の創始者である神功皇后は、本州の西部から特別な訓練を受けた植女（うえめ）を招いて田んぼを耕させたと言われている。

この田んぼは、大阪の都会の中にある日本の農耕地としては珍しい、静かな場所である。歴史的には、住吉大社は多くの田んぼを管理していたが、都市の近代化に伴い、御田だけが残っている。御田には、かつて神社の入口のすぐ近くまで大阪湾が広がっていたことを示す塩分を含んだ土壌にしか生えない草、ハマヒエガエリなどの様々な特徴的な植物が生息していることが研究者により確認されている。

御田植神事

毎年6月14日、普段は静かな御田で、田植えの儀式である「御田植神事」が行われる。御田植神事は、田んぼを牛で耕し、苗をすべて手作業で植えるという、住吉大社の創成期の神事を忠実に再現した日本で最も有名な田植えの儀式である。

御田植神事は、まず苗と、参列者を清める儀式から始まる。その後、装飾された牛が木の鋤を引いて田を耕し、水で清められる。植女に扮した女性たちが神聖な苗を植える間、色とりどりの衣装を身にまとった踊り子や音楽家が田んぼの縁でパフォーマンスを行う。この祭の活気とエネルギーは、苗に強さと活力を与えられている。